

学校経営のポイント

## “ノーベル賞受賞”を学校教育に活かす

若井 彌一

2010年10月7日(木)の国内紙(全国紙)では、今年のノーベル化学賞が、鈴木章・北海道大学名誉教授(80歳)、根岸英一(アメリカ)パデュー大学特別教授(75歳)の日本人研究者2人とリチャード・ヘック(アメリカ)デラウェア大学名誉教授(79歳)の計3人に授与されることに決定したことを大きく取り上げている。

### 「蛍雪の功」、この快挙

2人の研究者の受賞決定の報道記事を読んでいて、筆者よりもさらに一世代も先輩にあたる方々の受賞決定を、「蛍雪の功」と表現しては、少々堅すぎるのかなとも思った。

研究分野が違うので想像の域を出ないが、2人の回想からは、貧しさに耐え、精神的に苦しい思いをしながら研究生を送ってきたというような暗いイメージは感じられない。むしろ、学問的な関心と誇りをもって、また、研究仲間にも恵まれて、充実した日々を送ってきていることが強く感じられる。

同水準の研究業績を有する他の人々が、国内にも国外にも存在することを予想しながらも、とにかく、化学賞受賞者の快挙を祝福したい。

広く知られている「蛍雪の功」は、貧しさに負けることなく、苦勞して勉学に励んで、その苦勞が実って社会的に認められる存在(地位)になることを意味するが、今回の受賞者である日本人研究者の紹介報道からは、少年・青年時代の経済的貧困生活の側面は窺えない。しかし、もちろん、これら受賞者が何十年も、平凡に、楽しい日々を送ってきた結果として今回の栄譽を味わっているわけではない。

どのような研究分野であれ、あるいは、学術研究分野以外の分野であれ、トップクラスに上昇してく

る人々には、ひたむきな継続的努力と、工夫のある生活の実践が共通の要素となっている。要するに、単なる思いつきと短期間の努力で手に届く賞ではない。

児童・生徒たちにノーベル賞受賞者のことを話す際には、ぜひともこの点に着目させたい。

### “学びのスパイラル”をあせらずに指導を

大々的に新聞・テレビ等、そして、その後は雑誌等で「ノーベル賞」が取り上げられる。しかし、多くの子どもたちにとって、ノーベル賞は決して身近な賞ではない。ノーベル賞を受賞した人々だけが「立派な人」とであると評価するような話し方は、むしろ、子どもたちの学習意欲を減退させることにもなりかねない。学校での学びが苦手(不得意)であると自覚するようになってしまった子どもにとって、ノーベル賞など、「関係ねえ！」話であろう。

大切なことは、どの分野・領域で活躍するようになる人々も、毎日、小さい努力の積み重ねによって、その思い・希望・夢が実現していくのだということ、を、どのように感動的に、説得的に説明できるかである。

幸いなことに、われわれがこの世でほどほどに認められる可能性のある分野・領域は「数えきれないほどたくさんある」と表現しても誇張ではない。そして、どの分野・領域であっても、学習し、さらに工夫し、改善したりする自覚をもって研究する態度と実践が不可欠である。学校教育では、あせらずに、(楽しさ 充実感 使命感)「学びのスパイラル」を昇らせる指導に努めたい。

(わかい・やいち = 上越教育大学長)

本紙は<http://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>でも掲載

●最新刊!

変動の時代の教育時事用語を徹底解説!

A5判 200頁 / 定価 2,520円

## 『教育時事用語の基礎知識』野原 明【編】

『教員の養成・免許・採用・研修』若井 彌一【編著】 A5判 370頁 定価 3,570円